

樋口一葉「琴の音」の背景―根岸の里に思い潜めて―

はじめに

近藤 直子

「琴の音」は、樋口一葉が下谷龍泉寺町に転居して初めて発表した作品で、雑誌『文學界』第二二号（明治二六年二月三〇日）に掲載された。

住み慣れた本郷菊坂町の家を後にし、一葉が新居と定めたのは下谷区龍泉寺町三六八番地の二軒長屋であった。「琴の音」は、この家から徒歩で行くことが可能な、根岸の御行の松の辺りを舞台に、天涯孤独の少年・渡邊金吾が、森江しづの奏でる美しい琴の音にすさんだ心を洗われ、更生して行くという内容の上・下段から成る短篇小説である。

題名の典拠は、「源氏物語」須磨の巻や「古今和歌集」に収められた和歌にあり⁽¹⁾、加えて「琴の音」月「松風」といった古典的修辭の取り合わせが下段で顕著に展開されることから、「琴の音」は、一葉が歌塾「萩の舎」で培った和歌と古典文学の素養を駆使して書き上げた作品であることは言うまでもない。

その一方で、「琴の音」はかつて「小品以上のものではない」⁽²⁾という評価を受けていたものの、近年では『文學界』との関わりから再評価が行われている。平田禿木との交流によって一葉にもたらされたペイターの審美思想や⁽³⁾、森鷗外が訳した「即興詩人」の受容を指摘する論考⁽⁴⁾、あるいは、心がねじけて破滅的な生活を送る渡邊金吾の更生というテーマを、当時の社会問題に対するメッセージとして評価する動き⁽⁵⁾も見られ、当代を代表する作家たちから得た知識を、重層的に織り込みながら執筆した作品であることが理解されるようになった。このように「琴の音」という作品は、古典文学と新しい文学の双方から影響を受けながら、その知識を縦横に取り入れつつ執筆された作品であり、一葉が「塵中日記」明治二六年一月二四日の項に「これならすんは死すともやめし」と記した背景を想像することができる。

一葉の作品は大別して、実際に訪ねた場所や経験した事物をテーマに書いた「たけくらべ」などの「実在系」と、現実のモデルによらず空想の中で執筆した「ゆく雲」などの「創造(想像)系」の作品の二系統に分けることができる。「琴の音」は、新旧知識を高度に駆使して執筆された作品である一方で、一葉の生活になじみの深い場所が舞台に選ばれている点では、やはり「実在系」に属する作品と見てよいはずである。

本稿では、一葉の実際の考えや行動を記録した「日記」をひもときながら、「琴の音」を書くきっかけはどのようなものであったかを詳しく考察する。

一 「琴の音」の位置

一葉は、二四年という短い生涯の中で一五回の転居を繰り返した。明治二二年に父の則義がこの世を去り、一七歳

の一葉が戸主となって母、妹を養う責任を負うと、本郷菊坂町の一軒家での暮らしをスタートさせた。次第に生活が困窮して行き、安定した収入を得るため商いははじめようと、吉原遊廓にほど近い龍泉寺町へ転居したのだった。その後商売が傾き、わずか一〇カ月で店を畳み、再び本格的に筆を執る構えで本郷丸山福山町に移り住んだ。そのいずれの住まいも一葉の文学に少なからず影響を与えた。とりわけ下谷龍泉寺町は、代表作「たけくらべ」誕生につながる運命的な場所となった。

龍泉寺町では、小さな荒物駄菓子屋を営む傍ら、平田禿木の依頼により、『文學界』に「琴の音」と「花ごもり」を寄せた。龍泉寺町で執筆されたこの二作には、後に「奇蹟の一四カ月」と呼ばれた一葉の快進撃を予感させる要素がある。というのも、「琴の音」を書く前の一葉の作は、戸主同士の結婚が許されない社会的な制約の中で、自らの想いを口にできず、相手を想うあまりに病気になる女性や「闇櫻」や、相手の男性を失ってもその人を想い続けて生涯を送る女性（「経つくえ」）、自らの芸術を世間に認めてもらえず、埋もれたままの人生を送る芸術家とその妹（「うもれ木」）、世の中との接触を避け、独り隠遁生活を送ろうと決意する女性（「暁月夜」）など、ともすれば自害を選ぶような女性や、深窓の令嬢のままならぬ恋をテーマにしていた。しかし、「琴の音」では、生活能力のない夫に見切りをつけて家庭を捨てる妻と、幼い頃に両親を失い、さ迷いながら成長した孤児とを主人公としている。また、「花ごもり」ではマザーコンプレックスを主題とするなど、これまでとは全く違う世界観の作品を発表しており、一つの一葉文学の転換期と見るべきだからである。

一葉にこのような変化をもたらしたのは、龍泉寺町での暮らしが大きく影響したものと想像できる。龍泉寺町では商いを通して社会の片隅に生きる人々の辛苦を知り、人間を観察する鋭い洞察力を養ったとする説が定説となっている。そのような境地に到達するまでの一葉の葛藤は、一葉日記につぶさに見ることができる。

二 龍泉寺町時代の日記

下谷龍泉寺町へ転居する直前の明治二六年七月一日から始まる日記の表題は「塵之中」である。屋根に瓦を置いた家は僅かで、長屋や板葺きの粗末な家屋が並ぶ街の環境を表したものであると同時に、世塵にまみれた商い生活を端的に示す表題であるともいえる。

龍泉寺町時代の日記は全部で九冊あり、何れも「塵之中」「塵中日記」もしくは「日記ちりの中」とし、ほかに「塵中日記今是集」甲・乙種、「塵之中日記」「つゆしつく」「いはでもの記」がある。

一葉の目を通してつづられた当時の龍泉寺町、あるいはそこに住む人々については、

- ・ かくあやしき塵の中にましハリぬる（「塵之中」明治二六年七月二〇日）
- ・ 御隠居様など呼ばれるハ昨日也―中略―あやしき町風の詞にこそいはれんといひしに隣の妻の御隠居様とやはりいふ 処がら伊せの濱をぎもとの名をよはれんとしもおもはさりしを（「塵之中」明治二六年七月二六日）
- ・ 今はた小家がちのむさくしき町にかたる乞食など様の人を友として（「塵中日記」明治二六年十一月一日）

などと記されている。これまで暮らしていた本郷菊坂町とは様相を異にする新しい環境について、母と妹を養うためという固い決意のもとにこの町に来てはみたものの、一葉にとつて、後悔と落胆を感じざるを得ない状況であったことが窺える。これが現実であった。

その一方で、戸主としてこの町で活路を見出そうとする一葉の姿も認めることができる。「落ちぶれて」と自身を表

現する反面、野々宮きく等の友人や妹のくにと吉原見物に出かけたり、「障子一重なる我部屋は和漢の聖賢文墨の土來りあつまつて仙境をなす 塵中に清風を生し清風おのづから塵中に通ず わが浮草之舎も又一奇ぞかし」（「塵中日記今は集」（甲種）明治二十六年一〇月九日）とも記し、一葉なりに龍泉寺町での快適さを見出した記録も残っている。さらに「七つといふとしより草々紙といふものを好みて」で始まる有名な一文は「塵之中」（明治二十六年八月一〇日）に書かれており、幸せだった子供時代、不本意ながらも小学校を退学した経緯、父の尽力で「萩の舎」へ入門できた喜びなどをつづっている。

これらの日記の記事から、一葉にとって龍泉寺町という場所は、かつての幸福な生活、すなわち「萩の舎」での雅な日々や楽しかった日常の思い出と、店を切りまわす女主となった今とが交差する街であることが見て取れる。そして古い自分を「しのぶ」ことは、過去との距離を測ることで、今の私の位置を確かめようとする意味があったに違いない。

三 根岸の里と龍泉寺町—過去と現在—

さて、龍泉寺町が一葉の生活の場であり「現実」であるならば、根岸はどのような場所と考えられるのであろうか。

「琴の音」は、（上）の段で渡邊金吾の来歴とその不運を語り、（下）の段では、琴を奏でる森江しづが唐突に登場する。その住まいは（下）の冒頭に、「御行の松に吹かせ音さびて、根岸田甫に晩稲かりほす頃、あのあたりに森江しづと呼ぶ女あるじの家を」とあることから、龍泉寺町と同じ下谷区の根岸、御行の松の辺りであることが理解される【図版1】。「琴の音」の舞台となった根岸とは、下谷北部に位置し、俗に「根岸の里」と呼ばれ、江戸近郊の閑静な土地として知られていた【6】。古くは文政三年の根岸を描いた「根岸略図」【図版2】から、酒井包一、亀田鵬斎、鈴木其一ら著名人



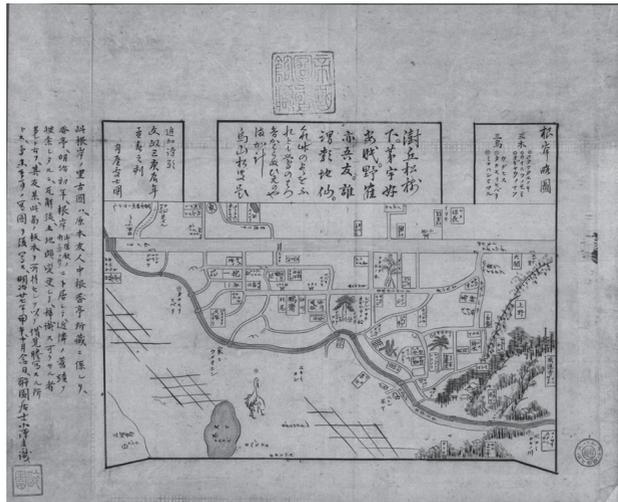
根岸の里の御行の松

【図版1】御行の松 年不詳

が居を構えていたことや、フタマタエノキ、カイホウノモミ、オギヤウノマツなどの三木、ウグヒス、タカモリヒバリ、ミカハシマツルの三鳥や、梅見、藤見、雪見の名所としても知られる、雅趣ある場所であったことが分かる。

また「江戸名所図会」巻之六第一七冊（天保七年刊）には、「呉竹の根岸の里は、上野の山蔭にして、幽趣あるが故にや、都下の遊人多くはここに隠棲す。花になくうぐいす、水にすむ鮭も、ともにこの処に産するもの 其声ひとふしありて、世に賞愛されはべり」と記され、裕福な家庭の別荘や、大店の主等が妾を住ませた場所でもあった。

一葉が龍泉寺町に住んだ同じころ、明治二七年二月から明治三五年九月まで、根岸には正岡子規がいた。子規庵と



【図版2】「根岸略図」小沢圭写 明治27年
(国立国会図書館ウェブサイトより転載)

称されたその家には、漱石、鷗外、高浜虚子、河東碧梧桐らが足を運び、子規の文学活動の場(7)となっていた。

鶯のねぐらやぬれんくれ竹の根岸の里に春雨ぞふる

侘びて住む根岸の伏屋野を近み蜜飛ぶなり庭のくれ竹

名月やわれは根岸の四畳半青々と冬を根岸の一つ松

など、子規は終の棲家となった根岸の四季折々の風情について愛着を込めて詠み、往時の様子を伝えている。これらの句から、一葉が「琴の音」を書いた明治二六年頃の根岸は一面が田圃であったと言われるもの【図版3】、江戸時代から大きく変化することなく、風流人が好んで住み、豊かな文化をたたえた場所であったと考えられる。一葉の作品「うもれ木」が、一流とされる商業雑誌『都の花』に初めて掲載された時の編集者であった藤本藤陰も当時根岸に住んでおり、一葉は明治二七年二月二三日に訪問している。

一葉にとって龍泉寺町が「現在」であるならば、同じ下谷区の根岸は、その風雅な地域性から、幸福だった過去を想起させる場所だったと考えることが可能なのではないだろう

東京名所



東京名所「根岸之里」 熊澤善太郎 画

【図版3】東京名所「根岸之里」明治25年

うか。一葉が龍泉寺町に転居を決めた時、「萩の舎」同門で親しくしていた田中みの子が住んでいた地域を避けた事実がある(8)。ここからは、「萩の舎」から遠ざかろうと固く決意していたことが分かる。にもかかわらず、転居後わずか四カ月経った明治二六年十一月一日には「萩の舎」の師匠である中島歌子を訪ね、庭を眺めながら、かつてこの家の娘とまで言われた自分を現在の生活とひきくらべて回想している。一葉は、やはり「萩の舎」という雅の世界から離れることができなかつたのだろう。「琴の音」を完成させ、星野天知に原稿を郵送したのはその訪問から一〇日後のことである。

一葉は「蓬生日記」(明治二四年十一月八日)に、「名高き御行ノ松なと見物す」と記し、「日記」(明治二六年六月二五日)では、「夫より根岸に下りて御行の松一覽 そのわたりの田の早苗いまは盛りにとるなる 日暮る、もしらす見るもをかし」と、時を忘れて早苗を刈る様子に見とれていと書いている。一葉が根岸に赴いた記録は三件のみ確認できるが、一葉にとって根岸は、強い印象を残したものと想像される。

ところで、根岸を象徴する樹木として御行の松が登場することも、根岸を舞台とする設定に大きく関与したと思われる。

たきあるところ

松のをとことにしらぶる山風は灌のいとをやすげてひくらん(「貫之集」卷一 94)

ひぐらし

松のねは秋のしらべにきこゆなりたかくせめあけて風ぞひぐらし(「拾遺和歌集」卷七 物名 372)

これらの2首は、「月影臨秋扇 松聲入夜琴 若至蘭臺下 還拂楚王襟」(風・『李嶠百二〇詠』)等の漢詩文に見られる「琴の音」を「松風」とする表現を踏襲したもの(9)で、「この事終りて後久子の君か引すさひ給ひしことのねは心なきおのれさへ松風のひ、きともやいふへからんとおもはれ侍りき」(『若葉かけ』明治二四年四月一日)と「萩の舎門人である吉田かとり子の妹・久子が弾いた琴の演奏について日記につづった一葉は、当然のことながらこの表現法を承知しており、習得していたことが分かる。

根岸、琴の音、御行の松は、小説「琴の音」において鍵となる記号群である。とりわけ御行の松は、根岸という場所を象徴すると同時に、松風の音を琴の音の比喩とする伝統的な手法を一葉に想起させるものであった。森江しづが弾く琴の音の構想は、根岸という土地と不可分のものなのである。

龍泉寺町ではなく、龍泉寺町からほど近い、けれども趣を異にする根岸に小説の舞台を求めたところに、雅を追求してやまない一葉の「過去」への未練を見ることが出来る。「琴の音」は確かに、一葉が新たなテーマを手に入れた作品ではあるが、龍泉寺町を細民街と捉えず、この町を「たけくらべ」の街へと昇華させるまでには、まだ時間が必要であったと言える。

四 結びに代えて

大胆な決意で下谷龍泉寺町へと転居し、慣れない商売を始めたものの、生活は思うようにはならなかった。それが龍泉寺町での一葉の結論であった。

「琴の音」の主人公である渡邊金吾を、小宮山嘉一郎をモデルとする論考(10)もある。嘉一郎は信州の元蚕種商人小

宮山庄司の息子で、庄司が一葉の従妹の広瀬ぶんと過ちを犯し上京。のちに東京に呼び寄せられた嘉一郎は苦勞を重ねた。その姿に金吾の境遇を重ねた説である。

しかし、父を亡くし、戸主としての重い責任を担い、孤独であった当時の一葉の境遇を考えると、琴の音に心癒され、更生したとも救済されたとも考えられる金吾の造形には、一葉自らが救われたいとの思いが込められていたはずで、一葉こそ金吾ではなかったかと思われる。

龍泉寺町時代に記した一葉の日記には、昔の述懐と現在の悲哀がつづられている。「琴の音」は、一葉の過去(思い出)を舞台に、救われたいと願う一葉の現実を乗せた作品であると言えるのではないだろうか。

注

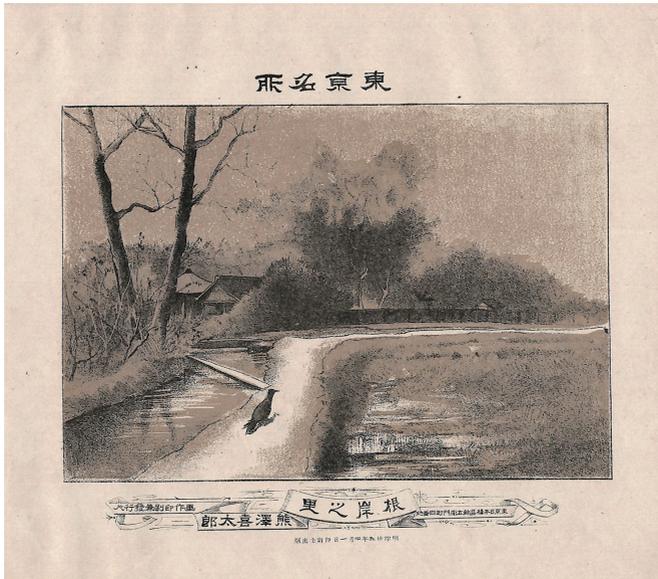
- (1) 琴の音にひきとめらるゝ綱手縄たゆたふ心君しるらめや(源氏物語)須磨卷・五節の君の歌)
奈良へまかりける時に、荒れたる家に、女の、琴弾きけるを聞きて、よみて、入れたりける
- (2) わび人のすむべき宿と見るなへに嘆き加はる琴のねぞする(古今和歌集)雑下・良岑宗貞(遍照)
- (2) 湯地 孝「樋口一葉」東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究室叢書第六編(至文堂 大正一五年一〇月)
- (3) 村松定孝「評伝樋口一葉」(実業之日本社 昭和三四年九月)
- (4) 安田保雄「樋口一葉と『即興詩人』——『琴の音』から『たけくらべ』へ——」(成蹊国文)14 昭和五五年一二月)
- (5) 愛知峰子「伝統性と時代性の融合——樋口一葉『琴の音』の試み——」(名古屋近代文学研究)12 平成六年一二月)
- (6) 台東区史編纂専門委員会「文人の里」(ビジュアル台東史) 平成九年二月)
- (7) 松本和也「下谷根岸いまむかし」(「下谷根岸」 昭和六〇年一〇月)
- (8) 牛込ならば神楽坂あたりこそ覺ゆれど知る人ちか、らむも侘しく(塵之中)明治二六年七月一五日)
- (9) 中野方子「白雪曲」と「琴心」——貫之の琴の歌と漢詩文——(中古文学)52号 平成五年一二月)
- (10) 林嵐研究発表「樋口一葉『琴の音』の構想とその基盤」(「国際日本文学研究集会会議録」20号 平成九年一〇月)



野原出雲松本

松の行御里の岸根

【図版1】御行の松 年不詳



東京名所

大行徳島の印作風

根之岸里

熊澤深喜大郎

辰橋五郎印 日一吉印 明治二十五年

【図版3】東京名所「根岸之里」明治25年

